

# 曲亭馬琴『縁結文定紋』—解題と翻刻— (上)

\*  
中尾和昇

## 要旨

曲亭馬琴は、その生涯において、計七十作の合巻を執筆・刊行した。これらの翻刻は、板坂則子氏によって精力的になされてきたが、文政年間の作品については、未翻刻のものが数多く残されている。合巻の研究が立ち遅れている原因の一つに、読本に比して研究資料が十分に整っていないという現状が挙げられる。そこで本稿では、馬琴合巻『縁結文定紋』（文政八年〔一八二五〕刊）の翻刻をおこない、簡単な解説を付した。

【キーワード】曲亭馬琴、合巻、演劇

今回から二回にわたって、文政八年（一八二五）刊の馬琴合巻『縁結文定紋』をとりあげるが、紙幅の都合上、今回は書誌・凡例および前編の翻刻を記すこととする。

## 一、書誌

底本 奈良大学図書館蔵本。なお、本文は早稲田大学図書館蔵本（へ13・01988）（へ13・02378・0086）（へ13・03082）によって校合した。

刊年 文政八年（一八二五）。

画工 歌川国貞。

筆工 前編は不明、後編は千形道友。

版元 西村屋与八（永寿堂）。

形態 中本。前編三卷十六丁一冊、後編三卷十六丁一冊。

寸法 一七・八×一二・一 檜（表紙）。一六・〇×一〇・五 檜（匣郭）。

表紙 錦絵摺付。表記は「縁結文定紋えんむすびふみのしやうもん」

前編／馬琴作／国貞画／文政乙酉新版／永寿堂発販「園□／像転歎青春／此猥藝出自画入」（前編）、「文定紋ふみのじやうもん」後編／国貞画／文政八乙酉／西村屋版「似淫不淫情誼両新旧端共誓八百萬神」（後編）。

後表紙 黒色無地（前後編共）。

柱刻 前編は「文定紋 壹（十五）」、後編は「文定紋 十六（三十）」。

その他 前後編共に、本文丁の後に「書林永寿堂新刻目録」と題した蔵版目録（二丁、丁付けなし）を付す。また、奈良大本には、前後編を綴じ合わせていたと思しき後補表紙が、外れた状態で残っている。白地に曙色の手彩色が施され、表表紙には「曲亭馬琴著／縁結文定紋 全六冊／歌川国貞画」、裏表紙には「文政八乙酉初春／④四番／町田氏」と墨書されている（「は」の円形枠内には曙色の手彩色あり）。



写真1 表紙（前編・後編）



写真2 後補表紙

## 二、凡例

○翻刻は見開き面（「1ウ・2オ」）ごとに記し、本文の後に登場人物の台詞などの書き入れを一段下げて付した。ただし、書き入れについては、右から左への方向にこだわらず、意味の通りやすいように並べた。

○本文中の合印（●▲など）は省略した。

○見開きの一面が巻変わりのために二つに分かれる場合、半丁ごとに分離し、その丁付けを記した。

○読み易さを考慮して、仮名書きの語句を漢字に置き換え、適宜、句読点・鉤括弧を補った。

○漢字に置き換えた字は、もとの仮名文字を振り仮名として付け、原文をたどれるよう配慮した。なお、原本の登場人物名表記に異なる用字が見られる場合は、原則として利用頻度の高いものを採用した。

○原文に本来付いていた振り仮名は、右と区別するために（ ）内に入れた。ただし、序文等に見られる、概ね振り仮名付きの部分は、その旨を注記して、原文通りに翻刻した。

○漢字は、置き換えたものに関しては、原則として新字体を用いたが、底本にあるものでは限り原字体をいかした。また、漢字・仮名ともに、異体・略体字は現行のものに改めた。

○誤字については、振り仮名の位置に「ママ」と注記し、脱字については、（ ）内に入れて示した。

○図版は、表紙をはじめ、見返し・序・口絵・本文等、記載のある箇所に関するはすべて掲げた。

三、翻刻

〔見返し〕(振り仮名は原本のまま)

曲亭馬琴戯編 文政乙酉陸册合巻

先その頃は室町將軍。足利仕込の時代世話に。其名は同じ。両箇の吉

三 八百十神乎誓言 縁結文定紋 前篇

抑これ下総大領。結城刺裁の狂言綺語に。浮名は似たる。八百屋

の主従

歌川国貞絵画 西村永寿堂梓

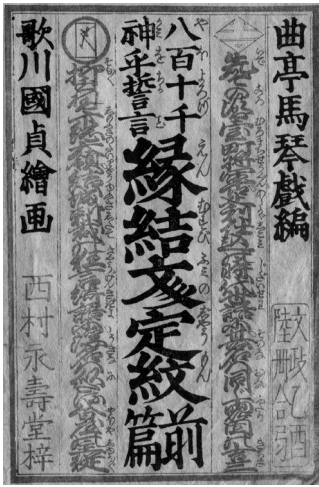


写真3 見返し

〔1才〕(振り仮名・句読点は原本のまま)

遊古の。千剣破たる神の世に。教し鳥の跡認て。果は浮名の手習に。

恋のいろはの浄書を。あげて思ひのかすくを。浚草紙も五六冊。お

七吉三があだな草。さはらばおちよ判兵衛も。ひとつ麴なる本合の。八

百屋よろづの神おろし。棚おろしといそがしき。睦月のころの松竹

梅。湯島に掛し額風爐の。釜屋碓兵衛が山ぶきは。花いろ色悪。二枚

目の。小判の舌を富楼那の弁長。坊主吉三が今般の発心。懺悔々々の

河洗垢離に。六根清浄吉祥みん縁。甦生めでたき土左衛門殿吉が使気

も。稜のとれたる盆前の。備阿針を兼帯なる。下女のお杉はおよびな

き。檜木不動の靈験利生。不思議もあれば。あるしの旧兵衛。素生を

問へば下野や。室の八島の夕煙。絶ぬ古跡は掲焉。縁起嬬談後妻の。

お篋が胸はあし利の。時代世話なる新趣向。長物語を断縮て。短き毫

に自序すと云。

文政八年乙酉春正月新版 曲亭馬琴戯述 印



写真4 1才

「1ウ・2オ」(振り仮名は原本のまま)

虎画ケトモ皮難クニ画キ骨人ハ知テ面ラ不知レ心ラ

ながむとて心ゆるすな花のいろの外面けめん姫ひめ百合ひやくり内心ないしん鬼おに百合ひやくり 愚山人  
結城判官氏則ゆきぎのほんぐわんぢのり

室の方むろのかた

八島の前やしままへ

雪降ればそれともみえぬ白鷺しらさぎの飛とぶときにこそあらはれにけれ 簑笠

小山兵衛為則おやまのひやうゑため

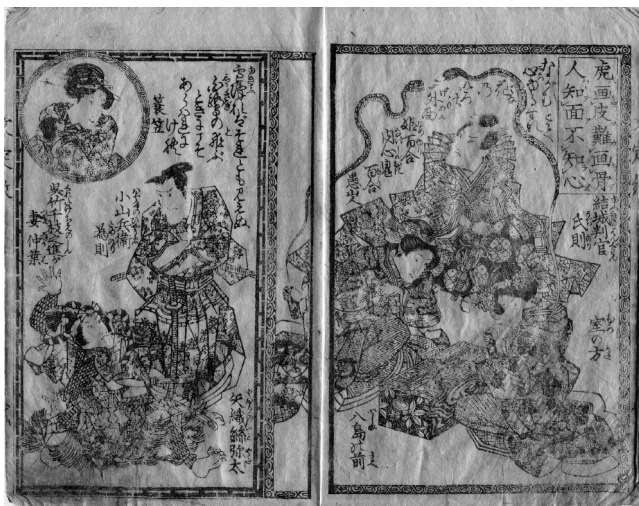


写真5 1ウ・2オ

矢織糸弥太やおりいとや

呉竹千枝之進くたけちえのしんが妻仲葉つまなかは

「2ウ・3オ」(振り仮名は原本のまま)

おなじ草くさの露つゆともしらで後のちつひにむすびそめけり谷川たにかはの水みづ 玄同

吉乘院きちりやうの扨つ従じゆ吉三郎きちざうらう

八百屋やほやの女兒むすめ阿七あしち

八百屋やほや旧兵衛きうべゑ 願主ねんす秋月庵あきづきあん牧之まき



写真6 2ウ・3オ

堰れてもめぐりあひつゝ、中たえぬ岩間のしみづ海となるらし 閑齋  
 芸子阿千世  
 八百屋判兵衛  
 吉祥院の所化弁長

「3ウ・4オ」（振り仮名は原本のまま）  
 注連の外に落るもしらさ秋のきのかかねに愛て笑るいがり  
 阿七が兄无闇の坊主吉三 著作堂



写真7 3ウ・4オ

殿吉が妻阿杉  
 南無不動誓の利剣縛の素伐てからげよ衆悪煩惱 狂齋  
 吉乘院の住持実相上人  
 八百屋の後妻阿篋  
 加麻屋碓兵衛  
 土左衛門殿吉

「4ウ・5オ」  
 昔、足利家の將軍たりし頃、下総・下野各々半国の主なり

ける、結城の判官氏則の譜代相恩の侍に、呉竹千枝之進といふ忠義の若者ありけり。又、同家中に、なし野南八といふ者あり。素生賤しき似非者なりしを、所縁につきて召し出され、出頭してぞ勤めける。そも、氏則の奥方八島の前と聞こえしは、白拍子なりけるを、氏則深く寵愛して、ほとり近く召し使ひ給ふ程に、先づ年、その腹に姫上生まれ給ひしかば、氏則いよく喜びの余り、母の八島を押し上して、本妻にぞし給ひける。志ある家子らは、かゝる主君の御計らひを、宜しきこと、思はねども、官高く禄重き郎党は、後難を憚りけん、口を噤みて諫めざりしに、一人この千枝之進のみ、いと口惜しく思ふものから、その身外様の哀しさは、目の当りに見参して、主君に申す由のなれば、諫めの状を奉らんとて、頻りに用意したりける。されば又、南八は今参りの者ながら、八島の前の弟なれば、その勢ひに従ひて、媚び諂ふ者少なからねば、千枝之進が目論見を、早くも告

ぐるもの者やありけん、南八これを伝へて、心の内に思ふやう、「今の世に、我が姉に水をさす者などのあるべきとは覚えぬに、千枝之進が分際にて、何程の事をしだいすべき。しかれども、蟻の塔より堤も崩る、とあれば、このまゝには捨て置きたし。聞討ちにしてくれんず」と、血気に逸る無法の短慮、羽子介といふ一人の僕に、心の機密を囁きて、その宵の間に主従二人、千枝之進が宿所を指して、狙ひ寄りんとする程に、千枝之進はかくとも知らず、近き辺りへ赴かんとて、宿所を出て只一人、馬見所のほとりにて、南八に行き合ひけり。折から隈なき月影に、紛ふべくもあらざれど、千枝之進は、心よからぬ南八なれば、物をも言はず見ぬふりをして、行き違ふを遣りも過ごさず、南八が浴びせ掛けたる劍の稲妻、肩先深くはたと斬る、深手に屈せぬ千枝之進、「心得たり」と抜き合はして、二人を相手に丁々発止と、怯まず避らず激しき太刀風、馬手より進む羽子介を、早足の当て身に蹴倒して、踏み込みく南八を、討たんとしたる千枝之進が、武運やこゝに尽きたりけん、思はず小石に消し飛んで、忽ちどうと転ぶ所を、南八「得たり」と上しかつて、起こしもやらず斬り伏せて、漸く止めを刺す折から、端なく来つる夜廻りの番人「あはや」と見咎めて、「スハ人殺し」と叫びつゝ、差し出す提灯斬り落とす、闇はあやなし南八は、難なく羽子介諸共、そのまゝ、逐電したりける。さる程に、呉竹千枝之進が横死の事、相手はなし野南八なる由、夜廻りの者共が定かに訴へ申せしかども、南八ははや逐電して行方知れずと聞こえしに、彼は奥方八島の前の弟なれば、日頃の悪事を言ふ者なく、

千枝之進を悪し様に申す者さへありしかば、氏則これをまこととして、南八は逃げ去りしと聞つゝ、穿鑿の沙汰にも及ばず、結句千枝之進を憎み給ひて、**つぎへ**

羽へなめら三宝、痛へぞうぬ。

へこの所、激しき立ち回りなれば、例のごとく詞書なし。但し、馬見所の飾り付け・小土手はすべて芝生にて、土手の後ろは藪、左右に松の立木あり。轡の虫の鳴く声など、宜しく相方ありと見るべし。



写真8 4ウ・5オ

松へ母様、どこへ行くのじやへ。

なへ習はぬ旅に幼子を、連れて行方は定めなき、有為転変の世の習ひ。千枝松、足は痛うはないか。

〔5ウ〕

〔つゞき〕私の遺恨によりて、却つて命を捨てたりし、千枝之進も罪は逃れず、「早く世帯を没収して、妻子を追放いたすべし」と、いと厳重にぞ掟給ふ、片手打ちなる主命も、八島の方に憚りて、諫め執り成す者もなし。哀れなるかな、千枝之進が妻の名を仲葉といへり。僅かに一人の男子なる千枝松は七才也。又去年の冬、世を去りし千枝之進が兄の娘を小いほど呼びて、四つにぞなりぬ。兄は世を早く去りしに、嫂も亦打ち続きて、此春はかなくなりしかば、千枝之進悲しみ歎きて、姪の小いほを養ひ取り、「行末は従兄妹合はせに、千枝松が嫁にせん」とて、その成長を末懸けて、待つより他はなかりしに、千枝之進は南八が為に討たれて、剩へ罪ならぬ罪に妻子さへ、追ひ払はる、嘆きの数々、余所の見る目も痛ましきを、皆只主君へ憚りて、頼もしからぬその中に、第一の老党なる小山の兵衛為則が弟なる、小山の次郎久則は、千枝之進が竹馬の友也。文学・武芸も一つに学びて、殊に親しく交はりたる志を違へずして、仲葉親子が追ひ払はる、道に密かに待ち付けて、一ト包の路用を遣はし携へ来りしに、脇差を千枝松に渡して言ふやう、「こは我が秘蔵の差添にて、関の孫六切れ味よし。さすがに武士の子と生まれて、腰刀を許されず、追ひ払はる、うたて

さよ。今饞に参らする。成長の、ち、これをもて親の敵を討ち給へ。主君に憚り奉れば、編笠に面を隠して、我が名を誰と名乗らねども、声は定めて聞知りつらん。これ迄也」と、懇ろに暇乞ひして別れけり。仲葉はかくまで浅からぬ、人の情の喜ばしさに、いと涙に掻き暮れたり。さて、あるべきにあらざれば、二人の子共の手を引て、ちどの縁を心当てに、鎌倉の方へ赴きしを、重ねて言問ふ人もなければ、便りも聞こえずなりにけり。

なへ思ひ掛けない情の賜物。言葉に尽きぬ御恩は海山。頼り少なき身の行方、推量なされて下さりませ。

次へとかくに命を全うして、艱難苦労も子共の為に、思ひ変ゆるが親の慈悲。必ず短気を出すまいぞや。合点がいたか仲葉殿。松へ母様、あれを伯父様に貰ふてもよいのかへ。

いへおばちゃん、早うあつちへく。



写真9 5ウ

「6才」

結城の判官氏則の奥方は、婚姻の、ち、幾程もなく早く世を去り給ひし頃より、八島の前、寵愛を得て、遂に本妻に成り上がり、姫上も既に、はや三才にぞなり給ふ。しかるに、結城平の老党なる小山の兵衛為則は、又これ結城の一族にて、家臣の列に連なれども、領地は下野小山にあり、先祖朝光より分かれたる、筋目正しき家門の武士也。これにより、結城の家に家督の男子なき時は、小山の男子を参らせて、主君結城の家を継がせ、又小山に男子なき時は、主君の御子を賜はりて、その家を継がせ給ふ。かゝる先例あるにより、氏則には只一ト柱の幼き姫上のみにして、男子誕生なかりしかば、一門すべて評義の上、小山兵衛為則が一人子の、僅かに三才なりけるを、主君氏則の婿養子にとて迎へ取り給ひつゝ、氏若丸とぞ名付け給ふ。されば又、氏若丸と許婚の姫上は、八島の前、の腹に出来て、氏則の実子にておはしませば、女子ながらも当家の物領。男勝りの者なるべしとて、殿姫と呼ばせ給へば、家中の男女、付きくゝの輩も、氏若丸より殿姫を敬ひ傳き参らせける。かくは世継の事をすら、早くも定められたれども、

「つぎへ」

手へ桜花同じ眺めの春ながら軒端の梅に遅れてぞ咲く。謎が解けたら為則殿、とくと思案を頼んだぞや。  
兵へ両雄は並びた、ず、名花は時を同じうせず。心ありげな花と花、散らすは夜半の風の手を、借りて恨みを返さんと、思し召しての謎々か。

へ八島の前、梅・桜の造り花に言寄せて、小山の兵衛を密かに語らふ事の訳は、次に見えたり。



写真10 6才

「6ウ・7才」

つゞき 氏則は、その齡今年三十余りにして、色好みの癖あれば、近き頃、又都より小室といへる舞姫を呼び下し、いつしかこれに心移りて、暫しもほとりを放ち給はず、第一の側女として、室の方と呼ばせ給へば、人々の敬ふ事、八島の前には及ばね共、君の覚えは本妻に異なるべくもあらざれば、八島の前は、見聞くにつけて、いと口惜しく妬ましく、引提の水の湯となるまで、胸の炎は絶えねども、さる遅しき性なれば、絶えて色には頭はさず、「つらく思へば、我も亦、初めを言へば白拍子にて、君の側女となりしより、思ふに増して本妻に迄上がりし身の、悋気・嫉妬に気色立ちてはしたなく、いよく飽かれ奉らば、敵に刃を貸す諺、我が身は却つて言ひ立てられて、追



ひ失はるゝ事もあらば、室の方の幸ひならん。いかにせまし」と手を当てて、胸に思案を人には知らせず、漸く思ひ付く事ありて、折もがなど待つ程に、ある日、兵衛為則が梅・桜の造り花を、殿姫の御慰みに参らせんとて、携へて奥深く来にければ、八島の前はこれ幸ひと、辺りの人を遠ざけて、兵衛をほとりに招き近付け、「殿姫に見せんとて、かく麗しき造り花を、手づから携へ持て来られしは、御身の嫁と思へばならん。こは言ふまではなけれども、氏若は和どの、子なるを、との、養子になり給へば、妾が為にも子なり婿なり。互に成長したらん時、殿姫を妻合はせられなば、玉椿の八千代までと、榮ゆく末を樂しむ甲斐なく、うたてやな、我が君は室の方に御心迷ひて、妻をも子をも思ひ給はず。しかのみならで、室の方は既に身重くなりけん、月の障りも二月ばかり、その事なしと噂にき、ぬ。懐妊噂に違はずして、生まるゝ御子の男子ならば、殿姫はかくてもありなん、いかでか養子の氏若丸に、家督を渡し給ふべき。遂には事に託けて、追ひ失はるゝ事あらば、只今その身の幸ひは、却つて後の禍ひ也と心付かずや。思へば危うし。されば、この造り花の人の眺めとなるにつけて、譬へて言はゞ本妻・妾。桜を花の王とも言へば、取りも直さず本妻にて、妾の梅に打ち越されて、春の初めの眺めと得ならず。梅咲く頃は桜なし、桜が咲けば梅は散る。和殿はいづれをよしとして、いづれの花の蔭にや寄るらん。梅を枯らして氏わかゞ、禍ひを祓はんとも、桜を散らして子と嫁に、後の憂き目を見せんとも、和どの、胸にあるべきのみ。よく／＼心し給へ」と、花に寄へし謎々に、早くも悟る小



写真11 6ウ・7ウ

山の兵衛、思はずも大息吐きて、「仰まことに理也。某いかでか身の仇を助けて、桜を散らすべき。しかれども、その梅はとの、愛でさせ給ふ花也。よしや憎しと思へばとて、枯らさん事は容易からず。なほ幾度も思案を巡らし、謀を定めてこそ、かの禍ひを祓ふべけれ」と、囁き答へて忙はしく、その座を退き出にけり。さる程に、小山の兵衛為則は、八島の前には言はれし事を、つらく思ひ巡らすに、「こは只婦人への妬みにて、室の方を追ひ失はんと、企みて言はれしみにあらず。もしかの腹に、若との、重ねて誕生あらんには、氏若丸は

巢守となりて、我が身も禍ひ逃るべからず。事の大事に及ばぬ先に、

「つきへ」

次へ夏より蓄む八朔梅、これぞ室咲き室の花。斬つて捨てたる誓ひ

の手の内。兄者人、御疑ひは晴れましたか。

兵へそれでこそ我が弟なれ。天晴でかした心底見えた。なほ又語ら

ふ旨もあり。刃を納めてまづく来やれさ。

「狂言半ながら頼まれ候。仙女香、京橋南伝馬町稲荷新道稲荷

の西隣へ転宅いたし、手広になり候よし、御評判く。

柳蔵鸚鵡語方知（扇に書かれた文字）

「7ウ・8オ」

「つき」室の方を押し片付ける思案もがな」と、恩愛に迷ひ初めたる

俄かの悪心。「とやすべきかくやせましと胸を苦しめ、枕を碎きて謀

を得たれども、此事を委ねんに、誰とて頼まん人もなし。これかれと

選まんより、弟に機密を打ち明けて、語らばばや」と思ひしかば、人

なき折を見合はせて、只一人の弟なりける小山の次郎久則を、ほとり

近く招き寄せて、流る、涙をおし拭ひ、「次郎よ、悪しくな聞給ひそ。

氏若丸に禍ひあり、今その仇を退治せんに、和殿ならでは語らふ者な

し。善にもあれ悪にもあれ、一人の兄を兄と思ふて、我が言葉に背か

ずは、一大事を告げ知らせん。もし又違背せんとならば、兄弟の恩義

もこれまで也。思案を定めて答へ給へ」と、言はれて久則心を得ず、

「事新しき仰かな。氏若丸は御身の子、某には甥なれども、今は主君

の若殿也。何ごと、はまだ知らねども、その禍ひを被はんは、某が願

ひ也。況や又、幼き時に父母世を去り給ひしかば、親とも思ひ奉る兄

上への頼ませ給ふを、いかでか背き申すべき。何事なり共仰せ候へ。決

して違背すべからず」と、誓ひを立てて承け引きければ、小山の兵衛

は喜びて、小膝を進め辺りを見返り、八島の前に言はれし趣、室の方

を失ふべき謀を説き示して、「この事他人は委ねがたし。和殿まづ、

俄かに身持を悪くして、人の謗りを受けよかし。その時、我又偽りて、

義絶の由を申立てん。かくて和殿は折を窺ひ、室の方を掻き攫ふて、

人なき方へ走り去り、刺し殺して影を隠せよ。しかる時は、室の方は

和殿とかねて密通して、走り去りしとも思ひ、主君もさこそ思ひ給

はめ。我が身は弟の不義ありとも、早く義絶をしたらんには、巻き添

ひの咎めを受けず。いよく此身安穩にて、氏若丸の世とならば、手

立てを巡らし召し返させん。いと言ひ難く頼み難き筋にはあれど、い

かにせん、これより他に術もなし。違背はあらじ、いかにぞや」と思

ひ入て囁くにぞ。久則は呆れ果てて、顔つくぐと眺めつ、只諫め

んと思ひしを、再び心に思ふやう、「かゝる非道を明かされしを、言

葉を尽くして諫むるとも、思ひを止まるべきにもあらず。我も亦諫つ

て、既に誓ひを立てたれば、今更に辞退しがたく、進退こゝに極まつ

たり。暫らく兄の心に任せて、室の方を奪ひ去り、その後は又、とも

かくも計らふ由のありもせん。まことに是非なき事かな」と、心の内

になげ、ども、気色に見せず莞爾とうち笑み、「の給ふ趣承知せり。氏

若丸の行末に、させる禍ひなきにもせよ、室の方に迷はされて、万に

荒み怠り給ふ、主君の為によき人ならず。君の為兄の為に、某身を暗くして、必ず為果せ候べし。只今申す言葉は金鉄。事偽らぬ証拠には何をがな」と見回して、折から花壇に据え置きし、室咲の八朔梅、「これ究竟」と庭へ下り立ち、その幹際より、一ト刀にはつしと斬つて携へ来つ、「これをば何と見られしやらん。今この梅の花は室咲。室の方まつこのごとく為果せん。心安かれ兄人」と、言ふに喜ぶ小山の兵衛は、扇を開きてうち煽ぎ、褒むるも憚るひそく声。再び額を突き合はせて、閑談時を移しけり。されば又、小山の次郎久則は、いっしか酒色に身を持ち崩して、人の謗りを見返らず、兄の兵衛はこれを怒りて、弟を義絶の趣を、主君へ聞こえ上げし頃、室の方はつはり病みにて、心地常ならず見えしかば、ある日、その保養の為に、「築山の下館なる萩の初花を見せよ」とて、腰元四五人差し添へて遣はされたりけるに、昼より雨の降りしかば、暫らく逗留したりける。久則は「これ究竟」と、譜代の若党船橋佐野平といふ者に、密事を示してこれを伴ひ、かの下館に忍び行きて、簀子の下に身を潜め、人の出入りを窺ふ程に、時しも七月十五日、室の方はその夕暮に、端近く立出て、庭を眺めてゐたりける。簀子の下には久則主従、右左より忍び出て、声をも掛けず、室の方を矢庭に取つて押さへつ、「あなや」と叫ぶ口手に手を当て、早くも掛くる猿轡、「仕合はせよし」と密めく所に、遅れて来ぬる一人の腰元、**「つきへ」**

佐へ支ゆる女中はこの通り。又もや人目にか、らぬうち、旦那お急ぎなされませ。

次へ思ひのほか手軽くいつた。ソレ佐野平、その猿轡を早くく。

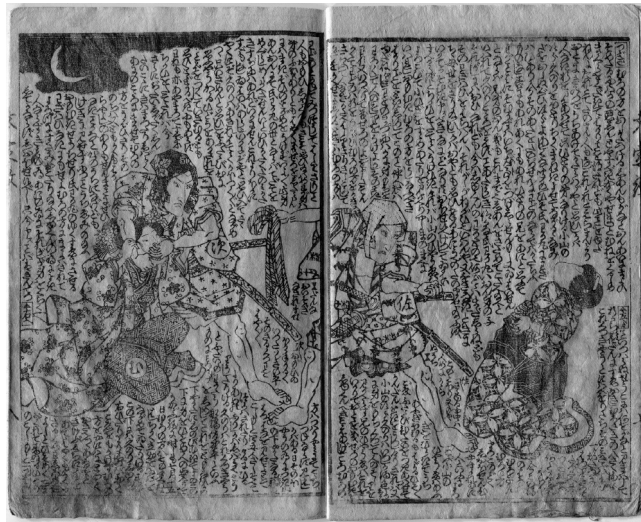


写真12 7ウ・8オ

「8ウ・9オ」

**「つき」**「あつ」とばかりに驚き騒ぐを、「声立てさせじ」と佐野平が、手練の当て身に倒れたり。「サア此隙に」と主従は、室の方を掻き攫ひて、垣を破り塀を乗り越え、何地ともなく逃げ失せけり。暫らくありて腰元は、息吹き返したりけれ共、事の趣よくも見とめず、辺りに文の落ちてありしを拾ひ取りつ、云々と人々に告げ知らずれば、

側女そばめの何某なにがしら、驚おどろき騒さわぎて走り集あつまり、まづその密書みつしょを開ひらき見るに、小山こやまの次郎久則つぐのりが室むろの方かたへ送りし文ふみにて、「今宵密こよひひそかに伴ともなふて走り去らん」とありしかば、「さてはこれかれ、かねてより密通みつつうせしに疑うたがひなし。遠とほくは行ゆかじ、追おつ駆かけよ」とて、八方はうへ手分てわけして行方ゆくへを尋たづねたりけれども、皆みな々なくむなく帰かへりにければ、已やむ事ことを得えず、その夜のうちに館やみだへ訴うたげ申まけり。さる程ほどに、結城ゆふきの判官氏則はんくわんじのりは、小山こやまの次郎つぐのりと室むろの方かたの、不義ふぎの逐電ちくでん聞きくとひとしく、怒いかりに堪たへず下知したちを伝つたへて、「かの女おんなめは、近ちかき頃ころ懐くわい妊にんせしと聞きこえしも、小山こやまの次郎つぐのりが子こにやありけん。その身の榮耀えいように恩おんを忘わすれて、男おとこと走はしりし不敵ふてきさよ。野のの末山すえの奥おく迄までも、隈くまなく尋たづねて引ひずり来きよ。兩人ふたりひとしく押おし並ならべて、手打てうちにせんず」と息卷いきまきて、なほ追おひくに手分てわけして、行方ゆくへを尋たづねさせたれども、年頃としころ諸国しよこくに合戦あつせん絶たえねば、隣国りんこくたりとも通路つうろよからで、さすがに遠とほくも尋たづね得えざれば、遂つひに行方ゆくへは知しれざりけり。この時にこそ、久則ひさのりを義絶ぎせつしたりし兄ひやうの兵衛べいゑは、「まことに名譽めいよの先見せんけんあり」とて、人皆みな感あぜしのみならず、さすがに主しゆの氏則じのりも、兵衛べいゑを咎とがむる由よしのなれば、その沙汰さたもなく止やみにけり。しかれども、これより後は、主従しゆづ心を置き合あふて、首尾しゆびよろしくは見みえざりしを、八島やしまの前まへが折をりたく、執とり成なしたりける故ゆゑにやよりけん、氏則じのり遂つひに心解こころとけて、初めのごとく何事なにことをも、小山こやまの兵衛べいゑに相談さうだんせしかば、為なり則も亦また、八島やしまの前まへを主君しゆくんに執とり成なし申ますにより、氏則じのり再び寵愛ちゆうあいして、これより側女そばめを召めし使つかはず。かくて三四年さんしやうねんを経へる程ほどに、八島やしまの前まへ又また身重みおもくなりて、男子おとこ誕生たんじゆうありしかば、氏則じのり喜よろこび大方かたならず、たから丸たからまると名付なづけらる。しかれど

も、先ま立ちて氏わか若物わかもの領りやうたる上うへは、氏則じのりの实じつ子こなるをも、そのま、二男になんに定められて、「成長せいちやうの、ち、小山こやまの兵衛べいゑが養子やうじたるべし」と約束やくそくあり。八島やしまの前まへはこれらの事ことを、いと口惜くちやくしく思おもひつ、「たから丸たからまるを家督かどくにこそ」と氏則じのりに勧めしかども、氏則じのりこれを聞きかずして、「小山こやまは当家たうけの老党らうだうなれども、頼朝よりとも卿きやうの御時おんときに、我が先祖せんぞ結城ゆふきの朝光あさみつ、下野げのの国寒川さむい郡小山こやまの庄ぢやうを給たまはりしより、一代いちだい小山こやまを名乗なられたり。これにより、今の世よまで、我われは下総しよさう結城ゆふきにあり、兵衛べいゑが所領しよりやうは下野げのにあり。もと一門いちもんの老党らうだうなれば、彼かれが子こを我が子ことして、我が子こを彼かれが子ことするを、不足ふそくに思おもふ事ことかは」と、昔むかしの事ことさへ引出ひいて、従したがふ気色けしきなかりしかば、八島やしまの前まへは再び言ことはず、心の内うちには、「氏若丸じわかに事こともあれかし」と祈いのるのみ。只目上まごうの瘤こぶのごとく、いとゞいぶせく思おもひけり。

○されば又、それより十年とせの春秋はるあきを経て、氏若丸じわかは十六才じゅうろくさい、たから丸たからまるも既すでにはや十才じゅうさいになり給たまへは、殿姫とのひめは氏若丸じわかと同じ年としにて、二八にやふの花はななり。されば、「今年の春夏はるなつには婚姻こんいんの式しきあるべし」と、下々しもぐまでも思おもふ甲斐かひなく、氏若丸じわかは去年こぞの冬ふゆより、些いさか気鬱きふさの病びやう起おこりて、日毎ひごとの膳ぜんも進すすまねば、手医ていしや者の誰たれ彼かれ匙さしを講こうして、薬くすりを進すすめ参まりするに、卯月うづきの末すえに至いたるまで、させる験しるしもなかりしかば、「なほ此上このうへの御保養おんほやうには、湯治とうぢに増ます事ことあるべからず」と、医師いし共どもの申ますにより、氏則じのりも「湯治とうぢこそしかるべけれ」と思おもひ給たまへど、領分りやうぶんには出湯いでゆなし。「上野かみのには伊香保いしかほの湯ゆ、下野げの那須なすにも出湯いでゆあり。しかれども、今国々こくにに合戦あつせん絶たゆる時ときもなきに、氏若丸じわかを遙々はるかと他領たかりやうへ遣つかはしかたかるべきか。この事こといかゞあるべし」とて、主立おもだちたる老党らうだうに、事ことの安危あんきを問とひ給たまふに、

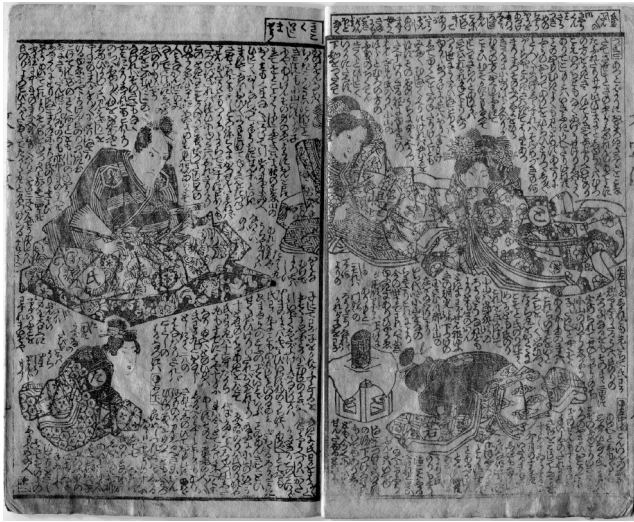


写真13 8ウ・9オ

小山の兵衛為則は、氏則の名代に鎌倉へ出仕したれば、今とて帰り来べくもあらず。その余家老の人くは、「しかるべからず」と申すもあり。されど、「忍びて赴き給はゞ、何者か見知るべき。只穩便の義をもつて、供人僅かに召し連れ給はゞ、しかるべし」と申す者、十人にして七人なれば、氏則この義に従ひて、矢折の糸弥太・機巻梭六といふ家子兩人に、手医者一人を差し添へて、その余の僕五六人、**次へ**氏へ随分その身を大切に、予が言ふ事を忘れまいぞや。

氏若へ段々の御教訓、殊更継目の重宝を預け給はる御志、心魂

に徹しまして、ありがたう存じ上げます。母上様にもご機嫌

よう、程なく帰国いたしませう。

しまへそれはマア、何よりのお饒で喜ばしい。だから丸、あれを見や。羨ましくはないかいのふ。

たへ兄上様の旅立ちは、羨ましく存じます。

「9ウ・10オ」

**つゞき** 主従僅かに十人と定めさせて、氏若丸を忍びやかに上野伊香保へ遣はし給ふ。既にして門出と聞こえたるその宵に、氏則は氏若丸を招き寄せて、「今度伊香保へ遣はす事、危うきに似たれども、いかにせん、「湯治ならねば速やかに本復しがたし」と医師ら言へり。今の世の人心は、笑みの内に刃を隠す。逗留の内、慎みて驕りをはぶきへりくだり、必ず我が子といふ事を、夢にも人に知られ給ふな。されば今度の饒に、暫らくこれを預けんず」とて、さ、やかなる厨子に入らる仏像を取り出して、恭しく押し戴き、「これはこれ、厄難除けの不動明王。和殿もかねて知りつらん、我が先祖朝光朝臣、頼朝卿よ拜領ありし、三国伝来不思議の霊像、御丈は一寸八分なれども、利益は世々に著し。さるにより、我が家代々家督の折、これを継目の印として、忝くも將軍の、御覧に備ふる希代の重宝。（一子相伝なるにより、守袋に秘め納めて、一ト日も肌には離さねども、和殿は家の惣領也。遂には譲る由あれば、帰り来るまで預け置くべし。夜となく日となく袴に掛けて、信心怠るべからず」と、懇ろに説き示して、そのま、

件の仏像を、手づから渡し給ひしかば、氏若丸は幾度か押し戴きく、大方ならぬ親の情の喜びを述べ給ふにぞ。片方に侍りし八島の前は、呆れ果てたる気色にて、殿姫とたから丸を見返りながら、吐息をつきて、又言ふ由もなかりけり。かくてその明けの朝、矢折の糸弥太・機巻梭六らの供人は、氏若丸に守り傳きて、伊香保を指して赴く程に、頃しも五月半ばにして、急がぬ旅の気晴らしにとて、あちこちなる名所に立寄り、あるひは霊地・霊山に、立寄り見廻り日を重ねて、伊香保の旅宿に着きたれども、さすがに人目を憚れば、氏若のほりには、糸弥太と梭六と手医者（いしや）の金槻方意のみ。此三人すら上辺には、同輩のごとくもてなして、主従なる事を知らせず。その余五七人の供人は、わざと旅宿を別にして、日毎に参る事もなければ、この湯治坊なる人はさら也、すべて旅宿の者共も、これを結城の若殿ぞとは、知る者絶えてなかりけり。かくて又同じ頃、武蔵の国豊島の郡丸塚のほとりなる、吉祥院の住持実相上人、吉三郎とて十四五なる小姓を一人召し連れて、これも伊香保へ湯治に来たり。氏若丸主従とは、襖一重を隔てたる、相宿にてありければ、只いつとなく物言ひ掛け、果ては親しくなりにけり。されば、糸弥太・梭六らは、氏若丸を此所へ伴ひまうせし初めより、相宿の旅人には、事に託けて交はらねども、「彼は正しく出家の事也。その供人は少年也。たとへ親しく交はるとも、何事をかし出すべき。若との、御徒然によき伽ならん」と思ひしかば、此方よりもいつとなく、主従親しくもてなす程に、件の小姓吉三郎は、大方ならず将棋を好みて、や、もすれば氏若丸に勧め

て、盤にぞうち向かふ。氏若も亦伽の欲しきに、将棋を好み給ひしかば、日毎に二人指し暮らして、後は臥所を共にするまで、夜を更かしつ、他事もなく、頻りに興にぞ入り給ふ。

実へハテ難しくなつて来たはへ。

方へア、これ、甚なら二三番お相手になりてへなア。

おへ将棋も詰めてはお気話まり。ちとお休みなされませぬか。

吉へコリヤ又、今度も負けさうな。どうぞ指し分けにしたひものじやが。

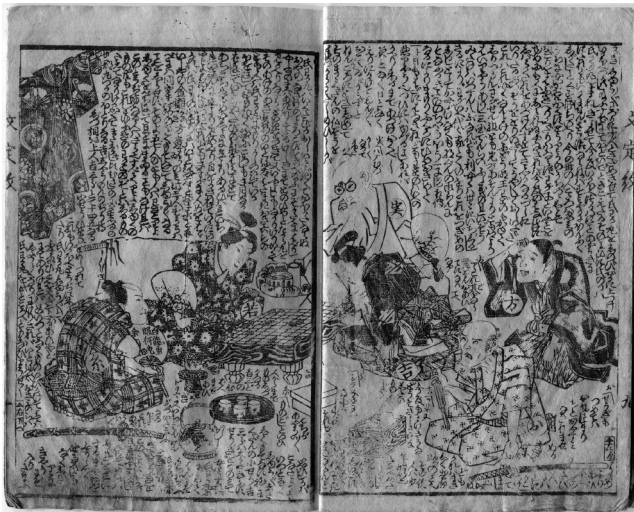


写真14 9ウ・10オ

若へシテ又、手には何があるの。それではこちが危うい。

糸へ物腰といひ人柄まで、物静かなる吉三殿、心へまであひ将棋。

ドリヤ又一番見物いたさふ。なるほどこれは危うい。

〔10ウ〕

さる程に、八島の前は再び思ひ巡らすに、「氏わかゞ旅立ちこそ、まことに勿怪の幸ひなれ。道にて失ふ手立てもがな」と、胸に思案は絶えねども、「小山の兵衛も今は又、我が為になる由もなし。さればとて、打明けて語らふべき人もあらず。凝つては思案に能はじ」と、心願に託けて、城下よりは五六里田舎の、円通寺なる観音へ、忍び詣での折からに、八島の前弟なる、かのなし野南八は、十三年ばかりの昔、呉竹千枝之進を討ち果たして、都の方へ逃げ去りつゝ、あちこちに身を寄せしかど、大方ならぬ曲者なれば、身の成り出る縁もなく、近頃いたく落ちぶれて、身の置き所なきまゝに、下総近く帰り来て、昼稼ぎをして餓へを凌ぐに、この日も物を取らんとて、円通寺へ忍び入り、書院の庭より奥の方を、窺ひく近付く程に、思ひ掛けなき我が姉の、八島の前は客殿の、縁先近く涼みてをり、遙かに顔を見合せて、互ひに驚くばかり也。しかれども、八島の前は、かゝる時にも逸早く、心き、たる性なれば、腰元らを見返りて、「今日は殊更暑き日なるに、乗物にて遙々と揺られて来たれば、何となく胸安からぬ心地せり。暫らく心を鎮めんに、皆の者は退きて、手を鳴らさずは来ずもあれ。とくく」と急がし立つれば、皆々次ぎて立つて行く。あと

見返りて八島の前は、なほ端近く立出て、招けば出来る弟南八、些か恥ぢたる気色もなく、別れし後の安否を問ふて、我が身の上を告ぐるにぞ。八島の前も、たから丸の誕生の事、氏若の事、心の企みを打ち明けて、言葉せわしく物語り、「御身ともかくもして、伊香保の旅宿に狙ひ寄り、氏若丸を刺し殺して、継目の重宝不動の尊像、奪ひ取つて立退けかし。我が身又、時日をはかりて此寺に参詣せん。その折、和殿も密かに来て、かの尊像を我に渡せ。たから丸が世とならば、呼ひ返させて家老にせん。これは当座の手付ぞ」とて、途中の用金三十両と吉文字の守刀を取り出して、なほも暫らく囁きけり。

島へ何事もこゝは途中。ハテ為果せたら、此姉が命に懸けて、悪うはせぬ。やがて吉相待つてゐるぞや。

南へ命懸けなる仕事の手付に、三十両と短刀一ト腰。これじやア根つから引合はねへ。着替の衣裳・櫛笄、いづれ金目のある物を、もうちつと気を張つて、取らせてやつてはどうだらうねへ。



写真15 10ウ

「11オ」

されば又、氏若丸は、吉祥院が供小姓なる吉三郎を伽にして、明け暮れ将棋を指し給ふに、吉三郎は、心ばせいと素直なる者なれば、氏若丸深く心に愛して、「ついでよくは結城へ伴ひ、父上に願ひ申して召し抱へばや」と思ひ給ふ下心あるにより、まづその素性を尋ね給ふに、吉三郎は涙ぐみて、「我が身は武威豊島なる何某が子にて侍り。二親早く世を去りて、姉のみ一人侍るかし。世に頼りなき孤兒なれば、亡き人々の菩提の為、出家の願ひあるにより、吉祥院に参りてをり」と言ふに、氏若憐れみて、「御事法師にならんより、我に仕へよ」とのたまふに、「御志は喜ばしけれど、その事は叶ひかたし」と答へて、従ふ気色なければ、氏若丸は本意なくて、ある時又吉三郎に、宮仕への事を勧めて、「所詮将棋の勝負をもつて、この事を定むべし。御事もし我に負けなば、我が家の子となりて仕へよ。我もし御事に負けたらば、望みの品を取らすべし。この義はいかに」と勧め給へば、吉三は暫し頭を傾け、「かくまでにのたまへば、ともかくも仕らん。但し、我が身は金銀も衣服なども欲しからず。御身が朝夕拜み給ふ、守袋の内こそ、尊き神か仏はあらん。我が身もし勝ちたらば、守袋を賜はれかし」と言はれて氏若心驚き、「守袋は取らせかたし。その余の物は何なりとも」とのたまへば、頭をうち振り、「否々、他には望みなし。まづその将棋はやめにして、いつものごとく指し侍らん」と言はれて氏若更に、退くに退かれぬ若気の誤り、心に思ひ給ふやう、「吉三が将棋は我より弱し。守袋を賭け物にするとも、渡すことはあらじ」

と侮りてうち微笑み、「しからは守を賭けにせん。とくく」と急がして、将棋の盤を引き寄せて、差し向かひつ、工夫を凝らして、その夜四つの頃おひまで、勝負を争ひ給ひしに、いかにかしけん、常にはあらで氏若丸は、吉三郎に三番統けて負け給へば、吉三は喜び勇み立ちて、守袋を催促す。氏若丸は困果てて、「由なきわざをしてけり」と、後悔そのせん次へ

若へ今宵一昨夜預けたぞや。明日は必ず返してたべ。  
吉へ今更何とおつしやつても、これは私が物じやぞへ。



写真16 11オ

「11ウ・12オ」

つゞきあらざれば、「まづ一旦は彼に渡して、明日は又人をもて宥めて、他の物と替えん」と、漸くに思案をしつ、衿に掛けたる守袋を吉三郎に渡しつ、「今宵は既に夜も更けたり。御事もこゝにて明かせかし」と、さあらぬ体にてのたまへば、吉三郎頷きて、「上人様も眠



り給はめ。しからばこなたに臥すべし」とて、氏若丸と押し並びて、  
 一つ蚊帳にぞ寝たりける。その時、糸弥太・梭六らは、次の間にあり  
 しかば、件の事の由を知らず。吉三郎が夜を籠めて、こなたに起き臥  
 しする事は、今宵のみにも限らねば、怪しむ者もなかりけり。○さる  
 程に、南八は八島の前に語らはれて、金と短刀を受け取りつ、いそが  
 しく立別れて、伊香保を指して行く道すがら、腹の内に思案をする  
 に、「氏若忍びの湯治といへども、近習の侍・手医者など、足軽・  
 僕かれこれと、供人十人なりとか聞くに、我身一つにて、やすくと  
 為果せん事心許なし。いかにすべき」と、二の足を踏まざるにあらね  
 ども、「さて止むべくもなきものを」と、心太くも道を急ぎて、幾日  
 もあらで上野なる、榛名山の麓まで来つる折、図らずも、昔我が召  
 し使ひし羽子介が、野伏の非人となりて、道のほとりにをるに会へり。  
 「こは究竟の方人ぞ」と、思へばやがて立寄りつ、別れし後の安否  
 を問ふて、「我が目論見の事の趣、斯様斯様」と囁き示し、「我が手に  
 付いて働けかし。立身出世の小口にまはれり。これは当座の前祝ひぞ」  
 とて、小判壹両取らせにければ、元より欲には目のなき羽子介、小判  
 を見るより、その昔、呉竹千枝之進を討ちし時、助太刀させてそのま  
 に、散りくになりし恨みも得言はず、立所に承け引きければ、南八  
 深く喜びて、事よく示し合はせつ、密かに伊香保へ起きて、氏若の  
 旅宿を窺ふに、八島の前に聞しに違はず、供人は十人なれども、僕は  
 余所の旅宿にありて、主のほとりに付き添ふ者は、両三人に過ぎざる  
 由、聞すまし見すまして、「心安し」と密かに喜び、ある夜、空は掻

き曇りて、あやめも分かぬ丑三つ頃、羽子介諸共辛くして、件の旅  
 宿へ忍び入り、こ、かと思ふを心当てに、氏若丸の闇の襷を、そと引  
 開けて差し覗くに、灯火の影幽かにして、十五六なる美少年、前後も  
 知らず臥したれば、その顔ばせは見知らねども、「こは氏若に疑ひな  
 し。我が物得たり」と心で領き、矢庭に蚊帳を切り落として、はや胸  
 先に乗つ掛くれば、「あつ」とばかりに驚き覚めて、起きんとするを  
 起こしも立たず、二太刀ばかり刺し貫きて、首掻き切て立つ間もあら  
 せず、後方に臥したる金槻方意、「盗人入りぬ」と呼ば、つて、起き

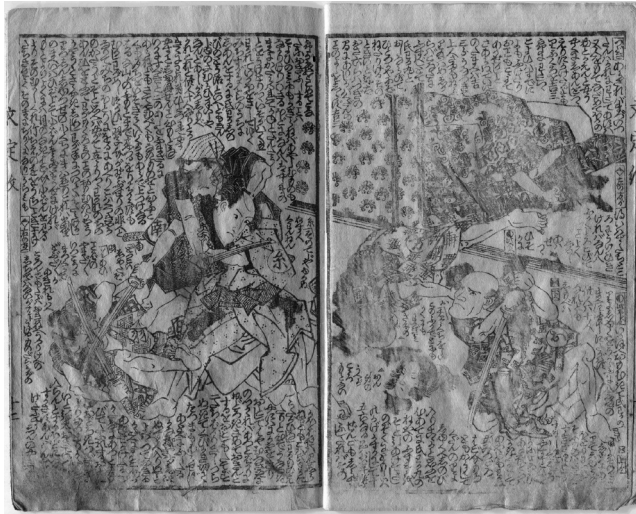


写真17 11ウ・12オ

る片方に羽子介が、浴びせ掛けたる一ト刀に、「あつ」と叫びて倒れた。音に驚き次の間より、押つ取り刀に糸弥太・梭六、込み入らんとする程に、南八すかさず行灯を、はたと蹴倒す真の闇、**つきへ** おへチエ、口惜しいこの深手。ともかくにも若君様の、御身の上  
が心許ない。

糸へその手じやゆかぬ、盗人観念。

南へどつこいしめたぞ。

羽へソレ合言葉のやまだく。一向に真暗で、どぶだくが呆れるはへ。転んでもたゞは起きねへ。移り替への質ではないが、ナントうけるものだらうがの。

「12ウ13オ」

**つぎ** 刃の光を目当てにて、斬り結びたる糸弥太・梭六、丁々発止と激しき太刀風、二人を相手に南八は、ちつとも怯まず挑み合ふ。その隙に羽子介は、氏若丸の死骸を探りて、守袋を奪ひ取り、早くも己が袷に掛けて、かねて定めし合言葉、「同士討ちすな」と南八を、助けて共に戦ふたる、敵も味方も滅多打ち。梭六と糸弥太は、案内知つたる旅宿なれども、思ひ掛けなき事なれば、合言葉の用意もなし。これによりて兩人は、やゝもすれば同士討ちして、既に数箇所の痛手を負ひぬ。しかれども、糸弥太は武芸にすぐれし若者なれば、かゝり寄りつ、羽子介を、切先下がりになり斬り倒す、後ろに窺ふ南八が、打ち込む刃に糸弥太は、七九の辺りを劈かれて、忽ち尻居にはたと伏すを、

再び討たんと南八が、競ふてかゝる折しもあれ、最前より太刀音に、吉祥院の住持実相上人、驚き慌てて出んとするに、灯火消えてせん方なければ、火口やあるとかゝりく、漸くに火をうちつけて、間の襖を押し開く。紙燭の光に南八は、驚き慌てて氏若の、首を手早く引提げて、深手に倒れし羽子介を、肩に引掛け庭口より、闇に紛れて逃げ失せたり。その時、実相上人は、まづ氏若の臥所を見るに、首なき死骸は血潮にまみれて、吉三郎はそこらにをらず。「こはくいかに」と胸潰れて、手負ひし人くを呼び生くるに、梭六・方意は事切れたり。その中に、糸弥太は、忽ちむつくと身を起こし、「おのれ盗人、いづくへか逃がすべきや」と呼び掛けて、起きんとするに腰た、ず、又仰様に倒るゝを、上人は抱き止めて、さまざまに勞りつゝ、盗人はや逃げ失せて、討たれし人の事の趣、吉三郎も此所に見えざる由を告ぐるにぞ。糸弥太無念の歯を食ひしぱりて、流るゝ涙を振り払ひ、「痛ましや是非もなや、忍びの旅宿といひながら、大切なる若君を討たせて、敵を誰とも知らず、二人は死して我も亦、数箇所の深手に敵を尋ねて、討ち取る事も叶ひがたし。申訊なき身の落度、せめて主君の追腹切つて、あとより追ひ付き奉らん。これまで也」と袷掻き分けて、腹を切らんとする程に、「ヤレ待て糸弥太、我が身はこゝに」と氏若丸、縁側の障子の陰より、走りて内に入り給へば、糸弥太深手の苦痛を忘れて、「さては君には恙なし。そも今までは、いづくにかをはしませしぞ」と問ひ申せば、氏若答へて、「さればとよ、今宵我が夢心に、一人の異人枕に立ちて、『御身の命甚だ危うし。此方へ来よ』

と伴ふて、いづことはわきまへねども、あちこちと経巡りつゝ、再び庭まで連れ立来て、『とくく内へ入るべし』と言ふかと思へは、件の異人は忽ち見えすなりにけり。今更思へば、我が守なる不動尊の靈験なるべし。しかるに、あとには不慮の災難、椽六・方意は既に討たれて、糸弥太は此深手。こは何とせん」とばかりに、うち涙ぐみ給ふにぞ。実相上人又驚きて、「扱は今宵、盗人に討たれしは吉三也。南無阿弥陀仏」と唱へつゝ、担ぎし衣を掻い遣りて、死骸を見れば首こそなけれ、紛ふ方なきその人なれば、氏若も亦不憫に覚えて、斯様くゝの事により、宵に将棋の賭け物して、守袋を吉三郎に暫し取らせし事の趣、一チ部始終を物語り、守袋を取らんとて、死骸の懐・臥所の下まで、残る隈なく尋ね給ふに、それには似たる物もあらで、かの盗人や落とし行きけん、短刀の鞘のみあり。氏若ますく驚きて、「守袋は惜しむに足らねど、袋の内には我が父より、暫らく預かり奉りし、不動尊の小像あり。我が家継目の重宝なるに、仮初ながら吉三郎が袷に掛けさせ、剩へ盗人に奪はれては、言ひ訳もなき我が過ち。いかにすべき」と後悔の、苦しき胸を押し鎮めて、「さるにても、此短刀の鞘は、正しく賊の手が、り。なほよく見ん」とて、灯火の影に照らして、「怪しきかな、鞘は蒔絵の惣梨地に、杜若の紋を付けたり。これは是、我が継母八島の前の紋所。吉文字と名付けられたる守刀の鞘なるを、我は定かに見覚へあり。しかるに今宵、曲者が取り落とせしこそ心得ね」と次へ

糸へ頼み申すは吉祥院、返すくも若君様、これ此鞘を手が、りに、

御合点が参りましたか。  
 実へ氣遣ひめさるな、心得ました。南無阿弥陀仏く。  
 へ我が身の無事は厄除の、利生違はぬ不動尊。その甲斐もなき人くゝの、敢へない最期が痛ましい。

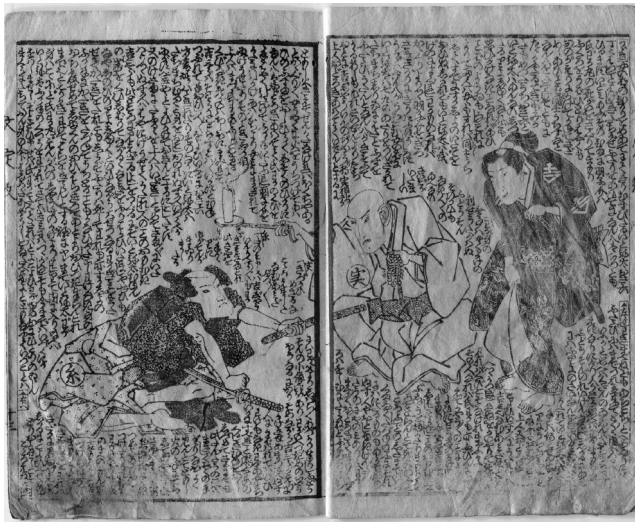


写真18 12ウ・13オ

「13ウ14オ」  
 つゞき 訝り給へば、糸弥太は頭を擡げて息を吐き、「若君それにて推したり。只世の常の盗人ならば、守袋のみ取りて、衣服・路用に手

を掛けざらんや。吉三郎を若君ぞと、思ひ違へて刺し殺し、繼目の重宝不動の尊像、奪ひ取つて逃げ去りし、かの曲者は問はでも知るき、八島の前の下知を受けて、忍び入りしに疑ひなし。尊像紛失したり共、仰わけかれあるにもせよ、再び館へ帰り給はゞ、御命危うかるべし。今は包むに由なやな。思へば不思議の縁にこそ。頼み申すは吉祥院我が言ふ由を聞てたべ。それなるは結城の若殿、我が為には主君也。斯様くの事により、忍びて湯治の出養生。病は本復し給へども、今宵に迫る不慮の禍ひ。館へとは伴ひがたき、様子は只今聞かる、ごとく、氏若丸を明日よりは、吉三郎と呼び替へて、武蔵へ伴ひ世を忍ばせて、力になりて給はらば、此上もなき慈悲善根。行末悪う酬ひはせじ。若君は又心を尽くして、かの曲もの、行方を尋ね、奪ひ取られし尊像の、御手に入らば故郷へ錦。その時にこそ結城の館へ、帰って御家を継ぎ給へ。某も御供にと、思ふに甲斐なき此深手。ともかくにも吉祥院、主君のうへを」と手を上げて、拝む拳に振り落とす、涙隙なき忠臣の、今はの言葉ぞあはれなる。物かたりふたつにわかる

これはさておき、なし野の南八は、吉三郎を氏若ぞと思へは、既に掻き落としたる首を片手に引提げて、手負ひたる羽子介を助け引つ、逸足出して、榛名山の麓まで、辛うじて逃げのびしに、痛手に弱りし羽子介は、忽ちに息絶えたり。南八これをば物ともせず、「先には此奴に奪ひ取らせし、守袋こそ肝要なれ。不動の像と氏若の、首さへ姉御に手渡しすれば、褒美はずつしり俺一人。此奴が死んだは幸ひ也。まづ尊像を」と笑みを含みて、やがて死骸を引起こしつ、守袋を取ら

んとしたる、折から降り来る明け方の、篠降り乱す雨の足、耳を貫く疾き雷に、稲光甚だしく、辺りも見えずなりしかば、さすがの南八

つぎへ  
南へこれはたまらぬ桑原く。金聾にならねばよいが。臍はあるやら探つて見たいが、まだく耳は離されぬ。

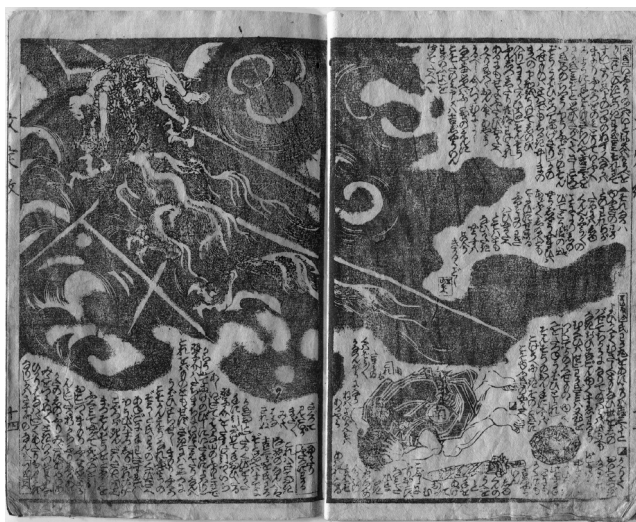


写真19 13ウ・14オ

「14ウ15オ」  
つぎ  
驚き恐れて、守袋を取る暇なく、木の本指して退く程に、ぐ

わらくく〜と激しき響きに、はや落ちかゝる雷火と、もに、雲間を降る一つの雷獸、世に言ふ火車はこれなるべし。鋭き爪を掻き立てて、しつかと掴む羽子介が、死骸を早くも掻き攫ひ、雲にうち乗り瞬く間に、いづくともなく失せにけり。さる程に、南八は木の本に身をひれ伏して、生きたる心地はせざりしに、暫らくして雷はおさまり、雨も忽ち晴れしかば、頭を擡げて吐息をつき、辺りを見ればこはいかに、ありつるほとりは燻りかへつて、羽子介が死骸はさら也、氏若丸の首さへも、何地行きけんなかりしかば、「これはいかに」と呆れ果てて、つくぐ〜と思ひみるに、「昔より人の亡骸を火車の攫ふは珍しからず。か、れば又、羽子介が死骸も火車が攫ひけん。それは惜しむに足るものならねど、肝心の守袋は、死骸の衿に掛けてあり。氏若丸の首さへに、雷火に撃たれて失せやしけん。これもかれもある事なければ、何を証拠に我が姉に、見せて褒美をねだるべき。そのみならで、吉文字の鞘を思はず落したり。せつかく為果せたりけれども、かくまに間が悪くなりしを、再び姉に会はんとて、又下総へ赴かば、敢へなく事の顛はれて、身の一大事になりもやせん。輕少ながら三十兩と此短刀の吉文字、捨て売りにしたところが、十や二十の金にはなるべし。危ない所へ近付かんより、まづ此金を元手にして、身の落ち着きを図るべし。そうじやく〜と悪者も、後先思ふ邪智推量。かの短刀を手拭もて巻き隠し、腰に帯びて、武蔵の方へ赴きけり。〇さる程に、糸弥太は氏若丸の身の上を、吉祥院に頼みつゝ、腹掻き、つて死にければ、氏若丸の嘆きはさら也、吉祥院も忠臣の志を感じつゝ、一チ

議に及ばず承け引て、氏若丸を諫め励まし、吉三郎が着替への衣を、氏若丸に着替へさせて、我がをる座敷に退かせ、吉三郎が亡骸には、氏若丸の衣服を着せて、さて事の趣を、今見しごとく慌た、しく、宿の主に告げたりける。こゝと主のをる間には、中庭ありて間遠なるに、しかも夜中の事なれば、人皆初めて騒ぎ立ちて、かの氏若の供人の、余所の旅宿にをる輩に、しかぐ〜と告げ知らすれば、足輕・僕驚き慌てて、ひとしく走り来にけれど、主従四人皆討たれて、敵を誰と知る由なれば、一兩人結城へ歸りて、事の由を注進しつ。残れる者は、主従の亡骸を取り納めて、続きて帰国に赴く程に、吉祥院はえ知らぬ体にて、氏若丸を伴ひつゝ、引違ひつゝ、発足せり。さればその頃、結城の判官氏則は、氏若丸の不慮の横死も、只公を憐りて、密かに亡骸を葬らせ、氏若死去の事は包みて、久しく披露に及ばね共、実子だから丸ある上は、さのみ歎きの色は見えぬを、小山の兵衛為則のみ、心の悲しみ遣る方なく、**つぎへ**

八島の前、誤つて殿姫・たから丸を殺す。事の訳は次の半丁の末に見えたり。

たへダア引  
鳴へ小癩な恨み、聞く耳持たぬ。怨霊退散。刃の威徳、これでも去らぬか、立ち去れ〜。

姫へこは何事ぞ母上様、お心乱れ給ひしか。誰かある、早う来て止むる者はないかいのふ。

「15ウ」

「つゞき」由なや昔八島の前に、語らはれつ、室の方を、失ひたりし非道の咎、今又我が身に報ふか」と、思へば後の世恐ろしく、これより病に閉ちこめられて、明け暮れ念仏三昧の、他にはわざもなかりけり。かゝりし程に、八島の前は、邪魔に思ひし氏若丸を、既に失ひたりけれども、南八が訪れなければ、継目の重宝不動尊は、いかにかしけん我が手に入らぬを、心許なく思ひつ、氏若丸の菩提に託け、月毎に

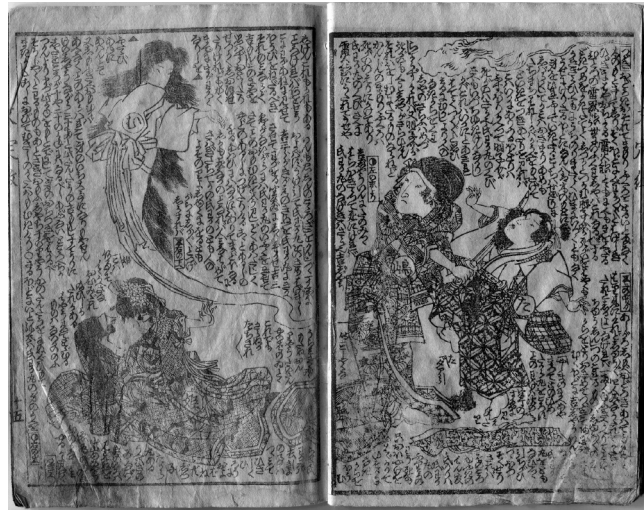


写真20 14ウ・15ウ

円通寺へ詣でて、南八に会はんと図るに、弟は再び来ざりけり。これにより、その事の胸に堪えねば、いつとなく、心地例ならず覚えし上に、秋の風さへ引添えて、兩三日うち臥したれば、殿姫もたから丸も、元より孝心深きにより、姉弟枕のほとりにありて薬を進め、撫で摩りも腰元共の手に掛けず、自ら看病し給へば、八島の前は喜びて、暫し微睡むと思ふ程に、誰とは知らず揺り覚ますを、怪しみながら目を開けば、思ひ掛けなき室の方の、幽魂枕に立ち現はれて、「情けなや八島の前、君の御胤を身に宿せし、妾を密かに失はせたる、恨みを言ひに来つるぞや。覚悟し給へ」と息巻きたる、気色に恐れぬ八島の前、「心得たり」と身を起こして、守刀を掻い取り早く、ひらりと抜いて斬り付くれば、「あつ」と呼びて又ありくと、弓手の方に現はる、を、再び丁と斬り付くれば、その度毎に「あつ」と呼びて、左右ひとしく倒れたる、音に初めて心付きて、と見かう見れば、こはいかに、斬り払ひしと思ひしは、室の方の幽魂ならで、殿姫とたから丸が、急所の深手に事切れたり。「さては過ちしたりけり。あら浅ましや悲しや」と、泣き叫ぶ声に腰元共、驚き立ちて集ひ寄る。降つて湧いたる禍ひに、氏則も亦走り来て、事の様子を尋ね給へば、八島の方は熱に浮かされ、「二人の子共を害したり。事の趣斯様く」と、真事・空事うち混ぜて、言ひ包めても面目なければ、共に死なんと取り直す、刃を氏則押し止め、憂きを見る目の言の葉を、尽くして論し給ふにぞ、八島の前は漸くに、自害を思ひ止まりけり。

鳴へ二人の子共を手に掛けて、何面目に長らへませう。止めずに死



写真21 15ウ

馬琴作

なせて下くださりませ。  
 氏へ思へばこれも過世すくの業因ごういん。御身おんが自害じがいすればとて、死したる子  
 共いの生いくるにあらず。我亦われ思おもふ旨むねこそあれ。刃やいばを納おさめて聞きかぬ  
 かやい。

---

## Summary

Kyokutei Bakin's "Enmusubi-Fumino-Jomon": A Review of the Subject  
and Transliteration (Part I)

Kazunori NAKAO

Kyokutei Bakin wrote and published a total of 70 *Gokan*, one type of illustrated novel, during his lifetime. Noriko Itasaka has vigorously carried out transliterations of many of these books, but for the works that were published during the Bunsei Period (1818-1830) little is in print. One reason for this gap is the lack of relevant research materials as compared to what is available for the *Yomihon* biographical novels. This paper is a transliteration of "Enmusubi-Fumino-Jomon", first published in 1825, with brief commentary added.

**[Key words]** Kyokutei Bakin, *Gokan*, drama